

昭和30年代の

僕と日本の少年時代

備忘録



千葉豹一郎

あの日、未来は明るかったー。

慌ただしくもほっこりと、

現代人の郷愁を誘う

“昭和30年代のマスカルチャー”

プラモデル熱中時代

Plastic models



先般、大手書店でひもの掛かった「大人のプラモデル」なる物を目にした。パッケージのレトロ調の字体から、40～50代以上を対象にしているのは明らかだ。

昭和年代中葉に国産化が始まったプラモデルは、瞬間に子どもたちを魅了し、この時代の誕生日、クリスマスなどの代表的プレゼントの一つにもなった。鉄道模型などを趣味とするおとなしい子どもばかりでなく、アウトドア派の悪ガキどもも加わり、プラモを作ったことのない同時代の子はまずいまい。

一つことに集中する子の姿はけなげであり、危ない遊びのように他人に迷惑を掛けることもないから、親たちもほほ笑んで見ていた。父親や大人が子どものプラモ作りを手伝う光景はよく見られ、そのうちに自分の方が夢中になってしまう主客転倒もままあった。それまでの木製模型は、半加工の度合いも低く、完成させるには技量が必要だった。それに対し、組立図に沿っていけばより簡単に完成できるプラモは、愛好者の間口を大きく広げた。

初期には「レベラー」などの外国製プラモが英語の組立図のまま売られていた。精度も良く、紛失しやすい細かな部品が余分に付いていて、さすがと思わせた。だが価格も高く、何より日本の物がモデル化されないのがネックとなり、その後相次いで設立された国産メーカーの製品が主流となっていった。『少年マガジン』、『少年サンデー』の2大マンガ雑誌の創刊と戦記物ブームとも相乗して、軍艦や戦闘機が人気の中心を占め、僕もたくさん作った。このあたりの事情はNHKの「朝ドラ」『ゲゲゲの女房』にも描かれていた。籠（かご）マストのアメリカの戦艦より、日本のそれの方がずっとカッコ良く、大和なんか大きさも性能も世界一だ！ 他の軍艦も戦闘機も他国に負けていないのが、ちょっと誇らしかった。

プラモはデパートやオモチャ屋、文具店

でも売ってたが、人気があったのは何と言っても種類がそろって商品知識にも長けた専門店だった。当時はどの町にもこうした専門店があり、みんなそこの子になりたがった。僕の地元にも3軒ほどあって、親友Sの家に近い区役所そばの「トンボ堂」は、他店では見かけない50円の戦闘機シリーズを売っていた。急降下させると腹の穴から爆弾が落ちる仕組みになっている。僕も2、3機買ったが、老人に近い年齢の優しい店主は無口で、店も狭く閑散としていた。

僕の行きつけは、うちから5分ほどで行ける国鉄（現JR）踏み切り脇の「H模型店」だった。当時はまだ手でバーを上げ下げしていた有人踏切を渡って、一人で、時には父親や叔父と一緒に何度通ったか知れない。ここが一番品ぞろえが良く、離れた所からも客が足を運んでいた。

道路に面したショーウィンドウには、見事に彩色された店主の物らしい作品が並び、いつも惚れ惚れ見入った。プラモの軍艦や天井から吊るされた戦闘機の奥の上方にある、ライトブルーと赤に塗られた木製の大きな民間船がひととき目を引いた。うっすらホコリをかぶっていたから、かなり古い物だったのだろう。

店内にはいつも誰かがいて、休日ともなれば子どもでごった返し、駄菓子屋と並び第2のたまり場と化していた。買いに来る子よりも、買いたくてもすぐには買えない子の方が多く、いつまでも帰らない。父親より少し年上だった店主は、いつも何か作業をしながら子どもたちの相手をしていた。ここでは店主が主役でスターだ。その人柄も店の人気を大きく左右する。明るく声も大きくて、子どもあしらいのうまいこの店主は人気があり、随分いろいろなことも教えてもらった。

ある時、Sが店主を「その筋の人、だったんじゃないか」と言い出した。店主はどちらかの手の指先が無い。年齢的に戦争の傷跡だと思って僕は気にしたことはなかったが、Sが妙に勘づいたのだ。一応父親に聞いてみると、元は業界紙の記者だったらしいと笑い飛ばされ、Sも安心してまた店に行き出した。それからは、行きたくない店に付き合わされそうな時は、「あそこの息子は不良だ」と言えば、Sはすぐに引き下がった。



*

プラモは100円ぐらいからあったが、数百円レベルにならないと戦闘機も軍艦も迫力に乏しく、大和クラスでは千円以上の物もあった。最後に金メッキされた菊の紋章を艦首に張り、浴槽で進水式をする時はワクワクした。動力用のモーターは箱の、数字が値段を表し、大型の大和級だと100のモーターを要した。メーカーのマブチが世界的企業と知ったのはだいぶ後のこと。プラモ専用のモーターをしこしこ作ってる零細か中小企業だと思い込んでいた。

プラモは作るまでが楽しい。だんだん欲も出て、専用ラッカーを買いそろえて彩色にも手を染めるようになる。しかし、出来上がると急速に興味は失せる。不器用な僕の場合は、幻滅と言った方が正しかった。時々手伝ってくれた器用な叔父や父親と同じ血縁とも思えず、H模型店の店主の手などは神の手にも思えた。友人の家に飾ってあったプラモも、次に行った時には別の物に替わっていたり、無くなっていたりしていた。増えてくれば置き場所にも困る。では、それらのプラモはどうなったかといえば、しばしば破壊行為の標的になった。マンガ雑誌には、ベビーパウダーをラッカーに混ぜて艶消しにする裏技などと共に、熱したヘアピンで戦闘機に被弾痕を空ける方法も紹介されていた。

僕もそうやって穴だらけにしたアメリカのグラマン機を、タイムカプセルもどきにそのまま庭に埋めたり、軍艦を庭の池に浮かべて爆竹で撃沈したりした。友人が自分のプラモ持参で加わることも多かった。後に知り合った同世代の多くも同じようなことをやっていたというから、禁じられた遊び、は広く流行してたようだ。マンガ雑誌の巻頭によく載っていた小松崎茂の派手な戦記絵にも触発されたのだと思うが、心ないことをしたと深く反省している。

その戦記物ブームも間もなく下火になり、

プラモの世界では人形劇『サンダーバード』のモデルの大ヒットが、後の『ガンプラ』につながるキャラクターというジャンルを確立していった。そもそもはこの2、3年前、サンデー誌に連載されていた『サブマリナー707』に端を発するが、ブームにまでは至らなかった。

また、この間に軌道サーキットを走らせるレーシングカーの爆発的ブームもあった。ところが、問題が多発してあっという間にポシャった。ブームで雨後の竹の子のように全国にできたサーキット場がSの家付近にもあり、僕も1台だけ買ってここに持ち込んだことがある。専用レーシングカーが

1000円前後と他のプラモより高めだったために年齢層も高く、賭け試合や万引きも横行して、社会問題になったのだった。

僕はこれらより、大河ドラマ（とはまだ呼ばれてなかった）の『太閤記』や『源義経』などの人気にあやかっただけのプラモの方に傾いた。何十個もの細かい房を貼り付ける作業は骨で、初めて肩凝りというものを経験したが、それ以降は何となくプラモから離れ、H模型店にも足を向けなくなった。

この辺が世代交代の分かれ目で、友人たちのほとんどもプラモを卒業していった。壊すためにせっせと作っていたようなもので、ただでさえ接着剤の硬化で良好な状態

のまま保存するのが難しいプラモはちょっと哀しい。亡くなったクラスメイトのお母さんからもらったレベルの「アポロ11」も、そのうち作ろうと思ってそのままになってしまった……。

昨今は、パチッとめめるだけで均一に完成できるプラモが主流だそうで、これはもうプラモではないだろう。専門店も激減して、稀有な存在になっているという。H模型店はすいぶん前に建て替わって、その折に屋号こそ今風に変わったものの、当時の雰囲気を引き継いだまま営業を続けている。

ケネディの時代

Age of JFK



忘れもしない、昭和38年（1963）11月23日土曜日。朝の9時過ぎだった。

「大変よ、ケネディさんが撃たれたんだって！」

2階で寝ていた僕は、祖母の言葉にたたき起こされた。寝床から飛び出して階段を駆け下りるあいだ、パレード中の大統領が沿道から飛び出した暴漢に拳銃で撃たれる光景が頭に浮かんだ。死んでいなければいいが……。茶の間では家族全員が、無言でテレビに観入っていた。事件があったのは日本時間の夜中で、パレード中にライフルで首と頭部を狙撃された大統領は、残念ながら既に亡くなっていた。

僕は恐ろしい符号に、背筋が寒くなった。その日は、アメリカとの衛星中継が初めてつながる記念すべき日となるはずだった。歴史的瞬間を一目見ようと、回線のつながる未明まで起きていた人も多かった。そこへ、この衝撃的なニュースが飛び込んできたのだった。

僕は観たい気はあったが、子どもにはあまりに遅い時間だ。いつものように『世にも不思議な物語』を観てから床に就かされた。実話の再現ドラマの走り、以降に多大な影響を与えた番組だった。その日の回は、かのリンカーンが暗殺の直前、事件を予知する悪夢に度々悩まされていたという

内容だった。そして、数時間後にケネディが暗殺された……。学校でも、この不吉な偶

然が話題になった。しかし、犯人と目されたオズワルドが2日後、護送中に射殺されるなど、映画顔負けの目まぐるしい展開の中で次第に忘れ去られていった。その後、リンカーンとケネディのあまりにも多い類似点を取り沙汰されるようになってからも、思い出す人は少なかった。こういうことには記憶力のいい僕自身も忘れていたぐらいで、それだけショックの大きかったことの証だ。

しばらくテレビを眺めていたが、気が滅入って何となく近所を一回りした。みんなテレビを観ていたのか人もまばらで、近所の市場の前にいた数人も事件の話をしていた。「まだ46だってねえ。可哀想に。禿（は）げのフルシチョフ（当時のソ連書記長）でも殺られちゃよかったのに」という声が耳に入ってきた。46歳か。意外と年を取っていたんだな。子どもには親以上の年齢の人はじいさんばあさんに思え、若いという感覚は無い。46で若けりゃ、政治家というのはよほど年寄りばかりなんだ、と思った。

池田勇人首相を始め日本の政治家は無論、フランスのド・ゴール大統領も確かにみんなじいさんぞろいだ。そこへ彗星（すいせい）のごとく現れたケネディは、日本人や世界中を歓喜させた。前任者が禿げちゃびんのアイゼンハワーじいさん（レーガンが出るまで最高齢の大統領だった）だったから、若く清新なイメージがいっそう際立った。

1950年代から60年代に入ると、車のデザインなども急激に近代的になり、新しい時代の幕開けを予感させた。ケネディはその象徴だった。若く美しい奥さんジャクリーヌと小さな子どもがいて、しかもアメリカ有数の大金持ちだ。ピーナッツバターサンドイッチをほおぼっていたアメリカの子どもがそのまま大人になったようなイメージで、いわゆるハンサムではない。だが、はにかんだような笑顔と、それとは対照的な右手をしきりに振る力強い演説スタ



イルが人々を魅了した。政治家というより、映画スターだ。

ヘアスタイルを真似た「ケネディカット」も大流行し、よく理髪店の店頭の写真や似顔絵が飾ってあった。子どもにも大人気で、存命の人物としては珍しく偉人伝にも名を連ね、僕も読んだ。第二次大戦中は日本軍と戦い、その時の武勇伝を映画化した『魚雷艇109』（1963）の予告を、亡くなる3か月ほど前の夏休みにテレビで観たばかりだった。昔のことだからニュースも新聞の写真もモノクロばかりだったが、僕の中では、偉人伝の表紙のようにいつもカラーだった。ダークスーツがよく似合い、出てくるだけで周囲がパッと明るくなった。その人が、何の前ぶれもなく突然去って行ってしまった。

亡くなってからもケネディの人気は衰えず、ベトナム戦争が泥沼化してからは神格化されるようにもなった。国葬の際にもお棺（かん）のふたが開けられなかったことから、生存説も囁（ささや）かれ、医学が進歩して治療が可能になるまで冷凍保存されているとも言われて、ご丁寧に週刊誌に冷凍になった遺体の写真まで載っていた。

事件からちょうど10年目、暗殺の真相に迫った『ダラスの熱い日』（1973）が公開され、マリリン・モンローなどとのスキャンダルで色あせつつあったケネディ人気に再び火がついた。

少し後には、偶然撮られていた暗殺の瞬間の映像も公表された。ケネディが首を撃たれて倒れ込むまでの映像は当時から何十回も見たが、その後の物はあまりにもショッキングなため公表が見送られていた。頭部



に被弾した瞬間、血しぶきが飛んで体は後ろにのけ反っている。事件の翌年、政府の調査委員会が提出した「ウォーレン委員会報告書」との矛盾（初めから信じている人間はほとんどいなかった）は明らかで、生存説や冷凍説にもわかに真実味が失せた。

その後も、ケネディと握手したことがきっかけで政治家を目指したビル・クリントンが登場すると、またも注目が集まり、事件の担当検事だったジム・ギャリソン原作の『JFK』（1991）やキューバ危機の裏面を描いた『デイズ』（2000）が公開され、関連本も相次いで出版された。

＊

客観的に見れば、ケネディは必ずしも有能な大統領とは言えない。芳しくない事実も次々明るみに出て、キューバ危機では世界を核戦争の瀬戸際まで追い込んだ。十数年前、来日した当時の国防長官マクナマラの講演を聞いて、それが本気だったことを改めて知らされた。最悪の場合、日本も間違いなく巻き込まれていただろう、という言葉にはぞっとした。

大部分が本当であろう女性スキャンダルも褒められたものではない。しかし、それだけ人を惹（ひ）きつける魅力があったということでもある。女性の側からも非難はあまり出ていないし、周囲も「一応やるべきことはやっているから」と見て見ぬふりで、それがまかり通ってもいた。短い間ではあったが、無邪気に信じられる指導者を持ち得たアメリカ国民は、やはり幸福であった。

こんな時代も、あれほどカリスマ性にあふれた指導者が現れることも、もうないだろう。フィリピンのマルコスやアジアのケネディ、ソ連のゴルバチョフは赤いケネディ。

期待を背負ったその後の指導者たちは、登場時にはこう呼ばれていた。僕にとってもケネディはいまだにヒーローで、あの時代を象徴する中心人物だ。はにかんだ笑顔に接すると、たちどころに当時の興奮が甦（よみがえ）ってくる。僕たちの年代以上な

キューバ危機

1962年10月、ソ連が革命後のキューバに核ミサイルを配備（※）したことを巡って米ソがキューバを挟んで対峙。軍事衝突（核戦争）勃発の瀬戸際まで迫ったといわれる国際危機。冷戦時代の軍事的緊張のピークとされる事件。

ケネディ政権下の米国と対立を深めていたカストロ政権下のキューバは、ソ連と親密になり、米国の侵攻に備えてソ連との軍事協力を進めていた。

ら、ケネディと三島由紀夫の死んだ日、3億円事件の起きた日に、どこで何をしていたかをはっきり覚えているはずだ。

僕はできることなら、2039年まで生きたいと思っている。なぜなら、この年に国家機密扱いとなっているこの事件の全貌が公表されることになっているからだ。もっとも、またしても肩すかしを食わされそうだが……。

外車変遷記

Imported car

「外車」という響きには、今も特別な感慨を覚える。幼児のころは、刑事ドラマの被害者を指す隠語「ガイシャ」とごっちゃになっていたのが思い出される。遅れた国だった日本では「舶来」というロマンチックな響きの言葉もあるよあこがうに、輸入品に対して強い憧れがある。大いなる幻影なこともあるが、概して国産より優れ、価格も高かった。その代表格である外車は、誰もがうらやむ夢の、そして富の象徴でもあった。

僕が育った昭和年代には、外車といえば主にアメリカ車を指した。この時代、車のデザインはモグラ型から宇宙時代を反映した流線型へと大きく変わり、ピークを迎えた「アメ車」は史上最も大きくなった。ベンツに代表される欧州車もあったが、巨大かつ派手なアメ車の前ではかすんで見えた。同時期に押し寄せてきたアメリカのドラマとの相乗効果もあって、余計にカッコ良く映った。

街で見かけるアメ車はどれも原色やツートンカラーで、クロームメッキ部品が大量に使われ、モノクロの画面で見ると派手な外観が目をつけた。大人が数人は楽に入るであろうトランク部分は不必要に長く、横に立てば戦車のような威容を誇った。最も大きいというキャデラックの年型の後部テールフィンが僕の背丈よりも高く、ほとんどがオートマチックで、ボタンで変速する車種やパワーウインドーのものまであった。一番憧れたオープンカーの幌（ほろ）もボタン一つで電動開閉され、58年型のフォードフェアレーンに至っては、鉄製の屋根の前部が折り畳まれながら個あまりのモーターであつという間にトランクに収納されてしまうのだから、国産車には及びもつかない。一様に車体が低く、サスペンションが柔らかいからフワッと滑るように走って、未舗装の多かった日本の悪路では腹を擦るのではないかと（実際にそうだったらしい）余計な心配までした。

走る姿は優美な反面、小柄な国産車の中ではそのけ、そのけという感じが無くはなく、優越感丸出しの表情を浮かべた左

ハンドルのドライバーが見えたりすると「バカめ、今に見てろ



Thunderbird Sports Roadster(1963年型)

よ」と思ったものだ。当時の子どもたちは、アメ車の値段や日本の道路が狭いことなどそっちのけで、みんな同じようなことを考えていた。僕と同年の所ジョージ氏もその一人だったようで、そのころのアメ車を中古で何台も購入した気持ちはよくわかるし、うらやましくもある。

夢の実現には広いガレージや駐車スペース、高い維持費をまかなう経済力が必要なのは今も同じだが、当時はドルが360円の固定相場。高額な関税も掛けられていたから、所有者は芸能人やスポーツ選手など、ごく一部に限られていた。力道山がオープンカーの幌を走りながら上げ下げしてる映像も何度か見たし、日本に数台しかなかったという石原裕次郎のドアが跳ね上がるベンツのガルウィングも有名だった。

僕が一番憧れたのは、スタイリッシュな探偵ドラマ『サンセット』の主人公が乗り回すフォード・サンダーバード61年型のオープンだった。先のとがったデザインから「ロケット」の異名を持ち、乗り降りし易いようにハンドルがカクッと首を振る。このミニカーを買ってもらって最近大騒ぎになった夜光塗料をヘッドライトに塗り、『サンセット77』の放送日にはワックスまで掛けていた。

ロケットの次に目を付けたのは、これとは対極のシボレー・コルベアというセダンだった。大きくなり過ぎた反動で生まれたコンパクトカーの一つで、アメ車には珍しい空冷リアエンジンだった。街中で見かける頻度も多く、これならそのうち何とかなるだろうという現実味もあって、親近感が持てた。後に『ウルトラマン』の科特隊（科学特捜隊）専用車としても使われ、国産車とはかけ離れたモダンな外観は、ミニカーの中でも目立っていた。だが、短期間に何台か買ってもらっていたために親に購入を拒否され、次に行った時には店から無くなっていた。

それから間もなく、隣町の友人の家に遊びに行った際、近くのプラモデルも売っている文具店でコルベアを見つけた。持ち合わせが無かったので、貯金箱からなけなしの400円を取り出し、翌日の下校途中に買いに行った。ところが、店の前で財布を開けると、入れたはずの100円玉が無い！ 何度まさがっても、顔をのぞかせるのは数枚の1円玉ばかり。焦った僕は400円を入れ忘れたと結論づけて早々に帰宅したが、

うちでは騒ぎになっていた。吉展ちゃん誘拐事件などで、大人はみんな神経をとがらせていたのだ。寄り道が学校にも知れて大目玉をくらい、ほとぼりが冷めて文具店を再訪した時には、またも売れてしまっていた。件の 100 円玉は、財布の外ポケットにちゃんと入れてあった。

コルベアとは縁が無かった、ということなのだろう。実車の方も横転事故が多発し、米の弁護士ラルフ・ネーダーによる欠陥車追求問題の発端となってしまった。「アメリカにリアエンジンなんかできるわけがない」。ほら見たことか、という口調で言ったのは父親だった。父は早くに免許を取り、まだ少なかった自動車雑誌も創刊時から買い、僕にもいろいろうんちくを傾けていた。父のアメ車の評価は低く、欧州車、中でもフランスのシトロエンを「車高が変えられるし、フランス人はケチだからガソリンも食わない」とえらく気に入って、机に黄緑のミニカーも並べていた。ド・ゴール大統領が乗っているのをテレビで観たことがあったが、カエルみたいな面構えはどうも野暮ったい。コルゲンコーワのマスコットに見えてならなかった。付き合わされて見にいった実物のシトロエンは、まるで巨大なカエルだった。

数年後、うちに初めての外車、フォードのコンパクトカー、ファルコンがやってきた。車種はいつもスポンサーである祖父母

吉展ちゃん誘拐事件

昭和 38 年 (1963) 3 月、東京都台東区で起きた男児誘拐事件。国内で初めて報道協定が結ばれた事件であり、公開捜査において犯人からの電話の声をメディアで流すなど、国民の強い関心を集めた。

被害者の吉展ちゃんが戻らないまま身代金 50 万円を犯人に奪取され、迷宮入りかと思われていたが、敏腕で知られる名物刑事、平塚八兵衛によって容疑者のアリバイが崩され、2 年がかりで犯人の逮捕に至った。吉展ちゃんは誘拐された日に殺害されていた。

欠陥車追求問題

ラルフ・ネーダーは 1965 年、自動車メーカーの安全性軽視を告発する本を出版し、米国の自動車産業、とくに GM 社と対立する関係となった。結果的にネーダーの告発は功を奏し、アメリカ政府は乗用車の安全性と交通安全に関する取り組みを強化する。

ネーダーの消費者保護運動を支持する活動家も増え、現在では政界や産業界に影響力のある大きな市民団体 (Public Citizen) になっている。



Falcon (1965 年型)



Mustang 2+2 Fastback GT

が決め、黒以外の選択肢は無い。コルベアと同じくらいの小振りなボディはうちのガレージにも収まった。後に洋画劇場で観た『逢う時はいつも他人』(1960) で、カーク・ダグラス (マイケル・ダグラスの実父) の不倫相手がまったく同じ車に乗っていて、すごく懐かしかった。

カッコはあまり良くなかったが、日本ではまだできなかったという、フロントガラス上部の日差し除けの紫と透明部分のぼかし処理など、技術的にはさすがに優れていた。ただ、燃費はやはり悪く、故障の多さには家族中が困惑した。当たりが悪かったのか、中古車だったからなのかはよくわからない。次の車検時には再び国産車に替わり、短い付き合いに終わった。

これと前後して、新婚間もなくアメリカに留学した叔父たちは、現地では若者にも手の届く 1964 年に発売されたばかりのフォード・ムスタングの中古を買った。スポーティーな外観とファルコンの部品の流用によって実現した低価格で、大ヒットとなっていた。調子も良く帰国時に持って帰ろうとしたが、手続きが煩雑すぎて断念。電気釜を積んで大陸縦断した後に手放し、その資金を元手にイタリアやフランスを回って戻ってきた。アメリカの料理のまずさと量の多さ (大食漢の叔父が持て余すのだから相当だ) に閉口していたので、ヨーロッパは天国にも思えたという。

日本では誰もが大事に扱う車をろくに洗車もせず無造作に乗り回し、ボンコツ同然の汚い車が多いことにもカルチャーショックを受けたらしい。医療費が高く車椅子の老人が多いことや、貧富の差の大きさに対する驚きも、たびたび手紙で触れていた。こうしたアメリカの現実、ドラマや映画には決して出てこない。だが、ケネディ暗殺やベトナム戦争などの混乱でアメリカのイメージ (本人たちによれば威信だ) は低下しつつあった。

叔父はその後頑張って、今度はスティーブ・マッキーンズの『ブリット』(1968) と同じムスタング・ファストバックの中古車を買ったが、国産車の性能向上に伴ってアメ車にも影が差し始めていた。排ガス対策と低燃費で遅れを取ったのが致命傷となり、昭和年 (1973) の石油ショックが止めを刺した。

翌年、歳が達した僕が免許を取った後も改善は見られず、冷やかしか半分で見に行っ

たキャデラッククラスの高級車でも細部の作りは雑で、国産車のような企業努力とは程遠かった。デザインも中途半端になり、迷走と苦悩とが見て取れた。車は国力と時代を正直に映すものだ。図体のデカさと押し出しの良さから、その筋には愛用されていたが、やがてベンツなどに取って代わられた。故障の多さも半ば常識化し、ドアの中から腐ったサンドイッチが出てきたなんていう悪評まで広がった。

昭和 50 年代からのイタリア車を中心としたスーパーカーブーム以降は、外車の範も激変してしまった。アメ車はその後、自国のドラマの主人公たちからもそっぽを向かれ、一時持ち直したものの GM、クライスラーのビッグ 2 は破綻 (はたん) ……。全盛期を知る僕には対岸の火事とは割り切れない。確かに 1970 年代以降のアメ車は魅力に乏しく、何よりアメ車らしさが無くなった。

かといって、性能が良いのはわかってはいても欧州車にも食指が動かないから、結局は国産車が現実的な選択となる。

今も当時のアメ車を見ると血が騒ぐ。バブル期には中古車店にもよく並び、憧れのロケットサンダーにも試乗させてもらった。かつて結ばれることの無かった初恋の人は、老いてなお輝いていた。大学生の時に世田谷の砧公園に捨ててあったムスタングも、思い切り蹴飛ばしてもまったくへこまなかった。うちのガダメだっただけで、あのころのアメ車はきっと頑丈で、よく走ったに違いない! と信じたい。

国産車は酷惨車?

Domestic car

パトカーが無線機を積んだら、坂を上れなくなった。冬場はエンジンがかかりにくいので、緊急用の車両は一晩中ロウソクやカンテラでオイルパンを温めていた。マンガのようなこれらの話は、昭和年代の国産車の実話である。いきおい、こうした公用車には供与の名目で払い下げられたボンコツに近い「アメ車」のお古が多く使われ、『少年ジェット』のパトカーもそうだった。

うちのそばの消防署にもモグラみたいな黒い外車があって、僕が子どものころでもかなり年季が入っていた。僕が剣道を習いに通っていたあいだも火の見やぐらのそば



ダットサン クーペ 16 型 (1937 年式)



フェアレディ 1500



にずっと置かれ、シミのこびり付いたシートを眺めながら「汚ねえ車、まだあるな」と友人と話していた。動いているのはあまり見たことがなかったが、何と僕が大学生のころまで現役だった。

警察官の拳銃も同様で、消防署の向かいにあった交番のお巡りさんたちも、重そうに米軍払い下げの大型拳銃をぶら下げていた。以前は握りの部分が露出していたのですぐにわかった。黒いはずの拳銃はこげ茶がかって、よく見ると表面がサビ付いていた……。政治家の中には「車なんか輸入すればいいじゃないか」との声もあったが、国産を推進していくことになり、昭和 30 年代に入ると各社から自家用車が発売され始めた。タクシーにも使われてた日野ルノー、いすゞヒルマンなどの海外メーカーとのライセンス生産に加え、旧通産省の「国民車構想」を受けた、ゆで卵を半分に切ったような愛らしい軽自動車スバル 360、トヨタのその名もパブリカ（パブリックカーの略）といった個性豊かな車がお目見えする。商業車にも、八百屋さんによくあったバイクに幌（ほろ）やボディをくっつけたオート三輪や、そこから発展した先端がカラスの口ばしのようなダイハツミゼットなどの個性派が並んでいた。

オート三輪はバランスが悪く、よく横転しては通行人も一緒になって助け起こしていた。当時の国産車は故障も度々で、信頼性も評価も極めて低かった。力が無い、エンストする、オーバーヒートする、バッテリーが上がるといったトラブルが付きまとい、当たり外れも多く、新車時の慣らし運転にも大きく左右されて、「酷惨車」（旧国

鉄の「酷鉄」もありましたネ）とまで言う人もいた。

突然動かなくなる車や、ボンネットを開けて中をいじくり回している車をよく見掛け、その横をアメ車などが悠々と走り抜いていった。うちにあったのはトヨタの初代ダルマ型クラウンで、幸いエンコのようなひどいトラブルには見舞われなかったが、そのためにはまめな整備を要し、ワックス掛けも欠かせず、僕も時々手伝った。

この車がアメリカに輸出されたと聞いた時は、買うのはよっぽどの物好きか勇気のある人以外にはないと思った。実際、高速道路など無かった日本を基準に作られたクラウンは、ハイウェイでオーバーヒートし、突然ボンネットが開くトラブルもあったという。

それでも車があるだけましだった。ゼロ戦の技術を受け継いでいるスバルはなかなかいい。いすゞも近くに本社と工場があるからメンテの点で悪くない。父親は車に一家言あるらしい意見を披瀝（ひれき）してたが、祖父らの意向で次の車はプリンスの初代スカイラインになった。とがった後部がアメ車っぽく、クラウンより少しモダンな感じがした。買う前には僕が初めて見るカラフルなカタログをめくって、みんなであれこれ言っていた。

父親の教え込みで多少の知識だけはあった僕は、ノークラッチ（当時は AT をこう呼んでいた）を推したが、免許を取ったばかりの叔父は 10 万円も高いのに力が無いし燃費も悪いと欠点をあげつらい、メタリックは水洗いだけでワックス不要だとも付け加えた（これは俗説だった）。国産の AT は故障も多いのがネックになって皆無に近く、貧乏日本、遅れた日本の象徴として深く心に刻まれた。父親や叔父に連れられ、まだ晴海でやっていたモーターショーに行くと、ほとんど AT のアメ車に圧倒されていて、本当に情けなくなった。

このころ発売された日産の初代セドリックも、セルモーターで始動できない場合に備えて、フロントバンパーに戦前の車のようにクランクシャフトで回すための穴が設けられている有様だった。しかし 2 代目には改善され、日産提供の初の国産 1 時間ドラマ『特別機動捜査隊』の覆面パトカーとして使われた。モデルチェンジの度に入れ替わり、それに合わせてオープニングタイ

トルも撮り直された。日産がプリンスと合併してからはグロリアも加わり、番組が年続くあいだ、その発展と歴史とを記録することとなった。

後の『ウルトラ Q』の主人公が乗り回していたオープンのプリンス・スカイライン・スポーツもこのころの発売だ。上野動物園に行った時に見掛け、日本もこんなカッコいい車を作れるようになったか！とちょっと見直した。後にイタリアのミケロッチのデザインだと知ってがっかりしたもの、台ほどしか生産されなかったという高価（200 万円近かった）な実物に出会えたのは幸運だった。翌年には国産初の量産スポーツカー、ダットサン・フェアレディが発売され、モーターショーで一緒に撮った写真が今も残っている。さらに、トヨタ S800、ホンダ S600 とスポーツタイプの車が続き、小粒でもピリリと辛い姿は、日々躍進する我が国日本とも重なった。

*

昭和 40 年代に入ると、伝説のトヨタ 2000GT が発売され、日本でロケをした『007 は二度死ぬ』（1967）のボンドカーにも使われた。セダンも種類、質、デザイン共に充実して、アメ車の縮小コピーみたいな 3 代目の通称「縦目グロリア」は今も根強い人気を保っている。このような国産車の発展は、僕はもちろん誰もの想像をはるかに超えていた。デパートなどでも駐車場の収容台数は驚くほど少なく、新たに建設されたビルも、車のことはあまり考慮には入れていなかった。

一方で、交通事故の激増と都市部での大気汚染は社会問題にもなっていた。車に不慣れな人が多かったため、窓から顔を出して死傷する事故も後を絶たず、酔っ払い運転の横行も頭が痛かった。外車も販売していた某ディーラーでは、新車発表会にちょっとしたパーティークラスの料理とビールを並べ、車で来た客にまで強く勧めていたの

国民車構想

国民車とはいわゆる大衆車、ファミリーカーのこと。日本の戦後復興が急激に進み国民所得が増えるなか、昭和 30 年（1955）には通産省が大衆車の普及を目指して「国民車育成要綱案（国民車構想）」を打ち出す。これは、特定要件を満たす乗用車の製造・販売には国が支援を行うというもの。

「国民車構想」の要件は厳しく、これに沿う自家用車は結局のところ発売されなかったが、国内の自動車産業の発展に拍車をかける役割を果たしたと言われる。

神風タクシー

自家用車の普及が進み、交通法規の整備が後を追う状況だった昭和 30 年代、営業効率を上げるために、スピード違反や信号無視、強引な追い越しなどの危険運転を行うタクシードライバーが増加。これを指して「神風タクシー」と呼んだ。事故も急増して社会問題となった。

を、僕も目撃している。さらに、まだ少なかった女性ドライバーへのセクハラまがいの嫌がらせなど、マナーに至っては最悪と言っても過言ではなかった。昭和30年代前半に問題化した「神風タクシー」顔負けの無謀運転のあげくに歩行者に罵声（ばせい）を浴びせ、国道の真ん中に車を止めて「バカ野郎！」と怒鳴り合う光景もよく見られた。パワーウィンドーもなく、血相変えながらハンドルを回して窓を開ける姿は傍から見れば滑稽（こっけい）そのものだ。

僕も夏休み中、家の前で車に跳ねられたことがあった。黒いセドリックが急ブレーキを掛け、僕はゴムまりのように数メートル吹っ飛んだ。車の陰から飛び出した僕に非があり、そうでなくとも日頃から車に気を付けるようにうるさく言われている。バシたらまずい！と僕がとっさに走り出すと、青くなったドライバーと近所のおばさん2、3人が追ってきた。一応は被害者である僕が逃げる逆転の構図もまた滑稽だ。僕は足、特に逃げ足は速い。200メートルほどで振り切って物陰に隠れ、やり過ぎたと思って出たところを見つかった。とにかく病院に行こう！と強く迫る鬼瓦みたいな顔のドライバーのおじさんを、本当に大丈夫ですからとようやくいさめ、顔見知りのおばさんには固く口止めして何食わめ顔で帰宅した。翌朝、車に当たった背中が少し痛かっただけで後遺症もなく、うちにもバレなかった。しかし、数年後にほぼ同じ場所で幼児と大型トラックの死亡事故が起きてしまった。

この間、ガードレールの設置や度々の法規制も奏功せず、渋滞も悪化の一途をたどり、車を敵視する風潮も強まっていた。深刻化した大気汚染は車大国アメリカも同様に、期限を切って対策を迫る国と無理難題とする業界とのせめぎ合いが続いた。しかし日本の動きはアメリカよりむしろ早く、石油ショックが逆に追い風にもなって大躍進を遂げ、日本車は国の顔にまでなった。`売ってやる。式の欧米とは対照的な`お客様は神様。の日本のきめ細かなサービスもこれを支えた。

僕もずっとATの国産車を愛用している。どれも年以上乗り、前の車は21年（！）乗った。ろくに手入れもしないのに大きな故障もなく、これだけ持つ日本車は今では誇らしく、感無量だ。ただ、近年の無個性化と過剰な装備、何より（輸出を念頭に置いたのだろう）排気量の増加は関心しない。テレビと同じく、国産車も共に育ってきただけに、原点を忘れてほしくない。脱ガソリン、車離れも進み、大震災以降は自動車産業の国内空洞化も懸念されている。これからの日本車はどうなっていくのだろうか？

サンドイッチのような車の三角窓 Vent window

昭和40年代の後半、つまり1970年代の初めごろまで、ほとんどの車に三角窓があった。後部座席横の窓ではなく、前のドア前部の、ちょうどコンビニエンス・ストアのサンドイッチのような形の窓のことである。一部の`アメ車`や、これを真似た国産車では逆三角形の物もあった。今でもカッコいいと思う車でも、三角窓があると古臭く映ると同時に、ノスタルジアも感じる。

エアコンが普及していなぶ三角窓は必需品だった。メインの窓のようにハンドルで上下させるのではなく（パワーウィンドーはまだあまり普及していなかった）、サッシ戸に付いたフックみたいにボタンを押して開閉する。後の一部の高級車ではパワー仕様の物も散見された。三角窓は外へわずかに開くだけだが、その面積が狭い分、風が強く吹き込んだ。車酔いする人でも、三角窓を開けていれば大丈夫ということも多く、冬場や雨の日の換気にも重宝した。車上荒らしにも悪用された反面、キーを車内に閉じ込めてしまった時は、最悪でも三角窓だけ割れば事足りた。いずれにしても、大きな方のガラスを割る、割られるよりは損害が少なく済む。三角窓が無くなってからもしばらくは、そう言って消滅を惜しむ声を多く聞いた。

エアコンがぼちぼち出回り始めてからも、まだ三角窓に活躍の余地はあった。車にエ

アコンを後付けするとグローブボックスの下に設置する他なく、助手席の人が冷風の直撃を受けて腹痛を起すといった笑い話のようなことが頻発した。そんな時、三角窓を開ければ冷気を程良く拡散させ、自然な心地良さを運んでくれた。しかし、ピラーが視界を妨げ、外側に開いたガラスが歩行者を引っ掛ける危険性も指摘され出し、デザイン上の問題もあって姿を消していった。製造コスト削減が一番の要因だったとも聞く。

僕も、免許を取った直後に買った中古車以来、三角窓とは疎遠だった。ところが、3年前によく探し当てた中古車で、久々に再会することになった。ただ、コンバーチブルの剛性を支えるための窓ゆえ開閉はできない。三角窓が無いことに慣れていると、確かにちょっとうとうとし。はめ殺しのため、雨天には水滴が払いにくく往生もする。いずれ無くなる運命だったろうとは思ふ。だが、三角窓のある車を熱烈に愛好するグループもあるそうで、そのメンバーには若い人も少なくないという。三角窓がファンを惹きつけてやまないのは、そのころの車にあった人間的な温かみに、ほっとする何かを感じるからだろう。



著者：千蒙豹一郎

作家・評論家。日本刑法学会、ベツト法学会会員。
著書に『法律社会の歩き方』（丸善）『スクリーンを横切った猫たち』（ワイス出版）の他、『東京新聞』、『猫生活』（緑書房）『ミステリマガジン』（早川書房）をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



昭和30年代の 僕と日本の少年時代 備忘録 for iPhone

千蒙豹一郎

あの日、未来は明るかった――。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、
高度成長期の東京が
いきいきと舞ります。

ケーシー先生や力山山に憧れ、アトムや鉄人に見惚れ、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが
身近に押し寄せてきた夢いっぴいの少年時代。一方で、周りを埋め尽くされたガム、連続する鉄道大事故、
暴走タクシー。牛の給餌の肉100%コンビーフや怪しい匂いしないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。
“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。



当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒 2012 年 9 月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980 円 (税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢 3-17-5
TEL.03-6379-8890 FAX.03-6379-6190 info@uni-w.com